

【編集後記】

「来たれ、県内で創業したい人」——今年のビジネスプラン・コンテスト

和歌山で創業・起業を希望する人の掘り起こしと創業間もない人への支援を目的に行われる恒例の『元気わかやま』——ビジネスプラン・コンテスト」が7年目を迎えた（主催は、わかやま産業振興財団、和歌山商工会議所等7団体による「創業支援セミナー in わかやま」実行委員会）。毎年、TVや新聞で報道され、事業化・商品化も注目される。例年2月末、広い会場で一般・関係者等多くの人が見守るなか、1次、2次の選考を通過し、最終選考に残った一般5、学生3（人・組）の応募者が、演壇で各10分の持ち時間をフルに活用したプレゼンテーション発表を行い、審査員との質疑を経て、最優秀賞（副賞は賞金20万円）等各賞が決定、表彰式が行われる。

1次選考応募時のやや粗削りな提案書も、事務局のサポートを得て、選考を経るにブラッシュアップされ、最終選考に提出されるプランは、どれもよく練られた内容である。プレゼンテーションでは、応募者のスピーチ、伝え方、パワーポイント等による見せ方も重要な要素で、本番を想定したりリハーサルを何度も重ねるといふ。

ところが、今年は、3月初旬まで「まん延防止等重点措置」が和歌山県にも適用されたため、発表会は延期となった（後日、会場・プログラムを変更し、無観客にて開催）。彼らが多くの時間とエネルギーを費やしてつくった成果、是非発表の機会があることを願う。すこし紹介させて頂くこととする。

まず、和歌山市の30歳の男性らによる『「木の国」から生まれた環境価値の販売』。2020年12月に国が発表した「グリーン成長戦略」において、「環境価値」の取引推進が掲げられた。その市場取引は、今後更に活発になると予想し、申請等に掛かる煩雑な手続きに対応するとしている。

和歌山県は、県土総面積の76.5%が森林の「木の国」で、古くから林業が盛んであるが、木材価格の長期低迷等による採算性悪化により、森林の維持、森林経営の負担が増大している。この現状に対処するため、「森林がCO₂を吸収することによって生まれる『環境価値』（購入するとその分のCO₂を削減したとみなされる）を市場で売買できる仕組み（J-クレジット制度）」の利用を進める。林業の収益性改善と企業の脱炭素化に貢献するもので、県内の森林所有者や林業経営体から委託を受け、登録手続きやCO₂排出削減に取り組む県内外の企業に対しての販売を行うという。

有田川町の37歳の男性による「ICT・アシスティブテクノロジーを用いた高齢者、障害のある方・お子さんへの生活充実サポート」は、作業療法士として長く現場に携わってきた自身の経験による有償サポートである。

重度の障害をもつ人がパソコンを操作して生産的活動を営むなど、高齢者や障害児者の生活は、テクノロジーの進展により、様々な可能性が生まれてきている。同時に、ICT機器を使える人と使えない人との格差も生じる。高齢者や障害者が、テクノロジーを活用し、活躍することで様々なマイナスの問題をプラスの方向へ導き、自分が挑戦できるかもしれない可能性に気付いてほしい、テクノロジーの多様な選択肢を実際に試し、その人に合った機器をコーディネートし、社会参加を促し、活躍できる場をつくることを目指すという。

他にも興味深いテーマばかりであるが、ここではプラン名のみ紹介することとする。

一般の部では「白浜で“障がい”と向き合う人に憩いの場となる就労継続支援事業所とアート公園を作りたい」、「熊野の里山・色川で、五感で楽しむ食体験を—作り手と食べ手をつなぐ体験レストラン」、「洋服みたいに着られる着物」。学生の部では、高校生による「すべてを有効的に使える地球にやさしい植物育成型消しゴム“開花宣言”」（植物の種を入れ、消しカスまで肥料に使える）、「使い終わった文房具の活用法—シャープペンシルの残った芯からダイヤモンド」。大学生による「1日カメラ女子、カメラ男子になろう」（スマホにないクオリティをもつ一眼レフカメラを旅行先等でレンタルする）。SDGsにマッチした高校生の発想に驚きつつ、これらがカタチになり、事業として成功することを期待します。

（谷 奈々）